

国語

解答番号 (1) (37)

I 次の文章を読んで後の問いに答え、それぞれ選んだ解答の番号をマークしなさい。なお、設問の都合上、表記を改めたところがある。

解答番号 1 11。

多様性やインクルージョン（社会的ホウセツ^a）といったSDG^sの用語がこれだけ叫ばれ、小学生でも学んでいる一方で、自肅警察や「迷惑をかけるな憲法」も同居している。多様性のかけ声と、同じ事をせよという無言の圧力が、対立せず共存している。これは一体どういうことなのでしょう？ そのことを考える際に、自己責任論という補助線を入れると、わかりやすくなります。

他人に迷惑をかけない範囲では、何をしてもよい。でも自己責任論が原則だから、他人に迷惑をかけてまでしてはいけない。¹この論理を逸脱した人は、ネットではしばしばバッシングに遭います。例えば乗降に介助が必要な障害者が無人駅まで行きたい、と述べたところ、JRの駅員にそれはできない、と言われて揉めたケースがありました。その後、ご本人がその顛末をブログに書いたところ、「事前連絡がない」「駅員への感謝の言葉がない」といったバッシングや誹謗中傷^{ひぼうちゅうきやう}にあったそうです。これは一体、どういうことでしょうか。

「迷惑をかけるな憲法」と自己責任論で説明すると、こうなります。自分一人で電車に乗れる人なら、無人駅でもどこに行っても良いし、直前に電車に飛び乗ってもよい。でも、自分で責任を取れない、つまり駅員による乗降介助が必要な障害者は、「過度な迷惑をかけない範囲内」で電車に乗るべきだ。そして、駅員に迷惑をかけるのだから、事前連絡も必要だし、迷惑をかけた後は、感謝してあたりまえだろう。こういう論理です。(①)

一見すると「もつともらしい」論理ですが、よく考えたらすぐく変です。なぜなら、この自己責任論って、突き詰めていえば、「自分でできる人は何をしてもいいけど、自分でできない人は何もするな」という排除の論理だからです。そうすると、障害者だけでなく、六歳の我が娘や、最近足腰が弱くなった八〇歳の私の父も、「自分一人のできる範囲に限定して行動せよ」となります。さらに言えば、「自分でできているつもり」のマジョリテイと称される人々であっても、エレベーターや自動車、自転車、飛行機など、移動において「自分以外の何か」に頼っています。マジョリテイ（＝既に配慮されている人びと）が依存する環境は許容されて、それ以外の人の依存する環境は許容されない、というのは、何だか「A」にも思えます。

でも、こういうことを講義で話すと、反論する学生が必ず出てきます。曰く「私たちだって必死で頑張っているのに！」と。そう、自分たち

だって、限界ギリギリまで頑張っている。駅員だって、少ない人数で必死に働いている。なのに、そのことを付度^{そだ}せず不平や不満を述べ、駅員に配慮しないなんて、「自分たちの頑張りを評価されていない」ようで、腹が立つ。他人を頼らざるを得ないのだから、もう少し身の程をわきまえよ、と。

この「わきまえ」というのもくせ者だと思っています。自己責任でできる範囲を理解し、それ以上のことは高望^{こうぼう}みするな、といった、自分の可能性へのリミッターとしての「わきまえ」に私には思えるからです。みんなで助け合って、無人駅でも乗り降りを手伝うなど、「できる一つの方法論」を考え合えばよいのに、「できない一〇〇の理由」をまくし立て、最初から拒否する。それを受け入れる。これが「わきまえ」だとしたら、それもある種の同調圧力であり、「空気を読む」という行為です。そして、その「空気」に異論を示すと、「わきまえない障害者」とレッテルが貼^はられる。(2)

実はこの社会構造自体が、ケアレスだと私には感じられます。そして、このケアレスな社会構造への異議申し立てを、「わきまえない障害者」の「わがまま」とラベルを貼ることに、「事なかれ主義」の暴力があるようにも、思います。

「迷惑をかけるな」「わきまえろ」。こういった命令形は、他者や世間による、自分自身の可能性へのリミッターとなっています。自分がしてみたいこと、興味のあること、気になっていることも、「迷惑をかけるな」「わきまえろ」といった他者比較や他者評価の基準で自己点検し、その範囲内でやっても許されると確信が持てたらする。そうでなければ諦める。

【Ⅰ】、自分自身の可能性にリミッターをかけていくと、どうなるでしょうか。自分自身が他者の顔色をうかがい、理不尽にも耐え、言いたいことも言えず、やりたいこともやらず、他者の意向を優先し、我慢し、それでも地道にコツコツ努力している。周りを見回せば、みんな同じように「迷惑をかけるな憲法」に従っている。それが「当たり前」なのに、その憲法を無視して、自己主張をしたり、わきまえなかったり、好き勝手にしている（ように見える）人は許せない。自分はこんなに頑張っているのに、わきまえない人を見ると、自分自身のこと²が自己否定されているようで、許せない……。こんな思いが背景にあるのかもしれない。

自分が我慢しているのだから、他の人も同じように我慢すべきだ。それは、次のようにも言い換えられそうです。

自分の尊厳が護^{まも}られていないのだから、他者の尊厳を大切にできない。
自分の権利を大切にできないのだから、他者の権利に想像が及ばない。

3
何か、変ですよ。

そもそも、自分の尊厳が護られない、自分の権利が大切にできていないことが、大問題のはずです。誰だって、楽しく生き心地よく生活するために、自分の尊厳は大切にされたいし、自分の権利も護りたい。そして、自分だけでなく、身近な他者の尊厳も大事にしたいし、他者の権利も護られてほしい。でも、それが制約されている、我慢している、人生や思考にリミッターがかけられる状態を「そういうものだ」と受け入れてしまっている。その上で、他の人だってリミッターがかけられていないと「おかしい」と思う。(3)

【Ⅱ】……お互いの権利を制約している方が、日本社会がスムーズに回ってしまっているのも、また事実なのです。みんなが我慢して、自己主張を控え、他者の顔色を見て、わきまえて、決められたルールに黙って従い、自己の言動にリミッターをかけている方が、結果的に誰かが命令しなくても、この社会はスムーズに回っていく。(4)

^b 海外に出かけた後、日本に帰国するたびに、いつもそう思います。電車は時刻通りに着くし、コンビニは二四時間開いているし、ネットツウハンでも商品は翌日に届いてしまう。ストレスなく移動や買い物ができる。これは日本の常識ですが、世界の非常識です。クールジャパン、ここにあり、です。でも、その負担を誰がしているのか。それは、一人一人の現場の従業員なのです。つまり、社会がなめらかに回るためには、歯車となって我慢して必死で働く個々人が必要になる。真面目な性格も相まって、頑張つて無理して、相手の期待に応えようとする。それで社会が成り立っているのだけれど、その裏で、一人一人の尊厳や権利にリミッターがかけられている。「付度」や「迷惑をかけるな憲法」の方が優先されることによって、自分自身も迷惑を受けにくい。でも、他者に迷惑もかけられない。(5)

それは、共に思いやること、という Caring with の社会とは真逆の、自分自身に注意や意識を向けられない、だから他者への注意や意識も限定的になる、という意味で、「B」だと思うのです。なぜ、そんな社会になってしまったのでしょうか？

(竹端寛『ケアしケアされ、生きていく』より)

問一 傍線部 a・b のカタカナにあたる漢字として、最適なものをそれぞれ選びなさい。解答番号は a

a ホウセツ

① セツレツな文章

② 自然のセツリ

③ セツゲンを歩く

④ ザセツを味わう

⑤ セツナテキな美

b ツウハン

① ハンロの拡大

② 河川のハンラン

③ ハンレイを調べる

④ 帝国のハンエイ

⑤ 病院にハンソウする

1

b 2

。

問二 空白部Ⅰ、Ⅱに補う語句として、最適なものをそれぞれ選びなさい。ただし、一度使った番号は二度使ってはいけない。

解答番号はⅠ 3 Ⅱ 4。

- ① したがって ② このように ③ とはいえ ④ あるいは ⑤ そこで

問三 本文中には次の一文が抜けている。補う箇所として、最適なものを(①)～(⑤)から選びなさい。解答番号は 5。

【それが「付度」や「自主規制」の論理です。】

問四 傍線部1「この論理を逸脱した人は、ネットではしばしばバッシングに遭います」とあるが、なぜか。その理由として、最適なものを選びな

さい。解答番号は 6。

- ① 自己責任を前提とした価値観では、困ったときに他人に頼る行為がわきまえない行為とみなされ、反感を買う構造があるから。
② 自己責任の論理は、その人が健常者であることを暗黙の前提としており、障害者を排除する極めて差別的なロジックであるから。
③ インターネット上の誹謗中傷は、社会構造ではなく個人の性格や特性の問題であり、論理的な正しさとは無関係であるから。
④ 他人から支援を受けるのを当然とする姿勢が、努力して自立していると自負する一般の人々への否定と受け取られやすいから。
⑤ 自己責任を果たせない人は批判されるべきだという考えが過激化した結果、必要な支援まで批判の対象となってしまったから。

問五 空白部Aに補う語句として、最適なものを選びなさい。解答番号は 7。

- ① ダブルスタンダード ② ダブルバインド ③ ダブルヘッダー ④ アンチテーゼ ⑤ アイロニー

問六 傍線部2「こんな思いが背景にあるのかもしれませんが」とあるが、どういうことか。その説明として、最適なものを選びなさい。

解答番号は 8。

- ① 他者への行き過ぎた配慮のせいで自分の行動に制限がかかっているという思いが多くの人々の中にあるかもしれないということ。
- ② 自分の権利が守られていないことへの不満が、「わきまえない」他者への苛立ちにつながるという構造がありうるということ。
- ③ たとえ配慮の要求が妥当なものであるとしても、自身の尊厳がないがしろにされているように感じられてしまうということ。
- ④ 度重なる行動制限の結果として、配慮を必要とする人々に対する過剰な批判が行われるようになったと考えられるということ。
- ⑤ 「わきまえない」他者に対する苛立ちの感情を自覚すること、自分の権利や尊厳が尊重されていないことに気づくということ。

問七 傍線部3「何か、変ですよね」とあるが、筆者はどのようなことを問題視しているのか。その説明として最適なものを選びなさい。

解答番号は 9。

- ① 個人の人間性が軽視され尊重されない状態が続くと、自己実現のために努力する活力が失われ、社会に閉塞感が漂ってしまうこと。
- ② 将来の可能性が閉ざされることは本人にとって辛いことであり、喜びに満ちた充実した生をまっとうすることができなくなることを。
- ③ 個人の自由と権利を尊重しすぎると、他者への配慮や共感が生まれにくくなり、他者と支え合う社会の基盤が揺らいでしまうこと。
- ④ 「わきまえ」を美德とする日本社会においては、他人の尊厳が守られていないことはそれほど重要な問題とは認識されていないこと。
- ⑤ 自分の尊厳や権利が制限されると、生活の質が損なわれるだけでなく、他者の尊厳や権利に気を配る余裕が失われてしまうこと。

問八 空白部Bに補う語句として、最適なものを選びなさい。解答番号は 10。

- ① 寂しい社会 ② わきまえた社会 ③ 「迷惑をかけるな」社会 ④ ケアレスな社会 ⑤ 自己責任社会

問九

次の記述のうち、本文の内容に合致するものとして、最適なものを選びなさい。解答番号は 11。

- ① 多様性を受け入れる社会を実現するには、一人一人が自分の可能性にリミッターをかけて慎ましく行動しなければならない。
- ② 今日の社会では、「わきまえない」障害者に対する非難を、合理的判断に基づく正当な反応であると考えた人が多数派である。
- ③ 日本社会では迷惑をかけてはいけないという空気が支配的で、それが社会の円滑な運営を可能にしている点は否定できない。
- ④ 自己責任を果たせない人々は公共サービスに頼らず自立して行動すべきだという理念は、全面的に否定できるものではない。
- ⑤ 障害者支援への拒否感が、海外と比較して日本ではあまり見られないのは、社会的な寛容さが広く共有されているからである。

II

次の文章を読んで後の問いに答え、それぞれ選んだ解答の番号をマークしなさい。なお、設問の都合上、表記を改めたところがある。

12

22

二〇二二年、E・H・カー『歴史とは何か』（原著、一九六一年）の日本語訳・新版（岩波書店）が刊行され、話題となった。「歴史とは現在と過去との対話である」などの主張で知られ、「歴史」をめぐる著作としてすでに定評あるものだが、社会学者・清水幾太郎の翻訳による岩波新書版（一九六二年）から六〇年ぶりの新訳となる。新訳者の近藤和彦は、歴史家・カーによる歴史への問いかけとし、カーが向き合った当時の歴史学に比重をおき詳細な補註を加えるとともに、あらたな版への準備稿（一九七二年ころ執筆）や自叙伝を付すなど、構成も岩波新書版とは異なったものとした。イギリス近世・近代史を専攻する近藤は、さらにこの六〇年間の歴史学の推移を意識した「解説」も執筆している。世界的には、二〇〇二年に、イギリスの歴史家・リチャード・エヴァンズが「序文」を付した、あらたな『歴史とは何か』の版が提供されている。二一世紀に、あらためてカーを手がかりに、「歴史とは何か」を問う状況がうかがわれる。

【Ⅰ】カーの著作は、冷戦体制のただなかで記されている。近藤やエヴァンズらの営みは、それを冷戦体制崩壊後に再読し再解釈する営みであり、言語論的転回によって、歴史学の理論―方法―認識が大きく揺さぶられるなかでのテキストの提供である。

ちなみに、言語論的転回とは、言語によって表現されたものと、ことばとは「A」な関係にある、という議論である。「事実」として、歴史学の作法によって提示した出来事は、資料にそのように書かれていても、実際の出来事とは異なる、という議論となる。「事実」の实在を前提として積み上げる歴史学にとり、決定的ともいえる転回を生じさせている。①

他方、カーの著作の日本語訳のばあい、岩波新書版は（冷戦体制のなかでの出来事である）六〇年安保闘争を主導した清水が、その敗北感のなかで翻訳したのに対し、新版は、新型コロナウイルスの感染拡大のなかで翻訳され、ロシアによるウクライナ侵攻のなかで読まれている。

このことは、いくつものことを考えさせる。まずは、「歴史とは何か」という問いは、「いま」が大きく揺れ動いているという感覚と結びついて出されてきていることである。②

また「歴史とは何か」は、これまでは、もっぱら歴史哲学の領域で議論されていたが、昨今では歴史学者自らがその問いを引き受けるようになっていくことである。背景には、「歴史」を語る営みに、歴史学にとどまらず、社会学や人類学、あるいは文学研究などの諸学が参加してきているということがあろう。歴史学が「歴史」を独占的に語るといふ事態が転換し、いまや、さまざまな学知による歴史叙述が提供されている。③

とともに、「歴史とは何か」という問い自体が、「B」を有していることも示している。カーの時代には、「歴史学は科学か」という一九世

紀後半以来の問いが、いまだに主たる問いであった。ランケ流の歴史学Ⅱ「個性記述的個別科学」と、コントラの「法則定立的個別科学」との二つの型Ⅰ系譜を有しつつ、歴史学が「科学」を目指して奮闘していた時期の問いである。(4)

このなかで、カーは「科学革命」を強調し、参照系とする「科学」それ自体の転換を認識したうえで、あらためて「歴史とは何か」を問題化している。さらにその後、一九七〇年代には、アナル派や世界システム論によって「歴史」の概念が転換するとともに、一九九〇年代以降には「歴史の語り」への着目がなされる。歴史が言語で語られる営みである点に着目し、あらたな問題系のもとで「歴史とは何か」が考察されることとなった。

(5)

カー「歴史とは何か」が論じたことのひとつに、「事実」と「解釈」をめぐる問題系がある。カーは、歴史家が選択した「事実」を扱うとして、議論を展開する。「事実」→「解釈」という一方通行モデルではなく、そもそも出発となる「事実」自体に解釈が入り込んでおり、複合的な「事実」を出発点として、「解釈」を積み上げていくとする議論である。「解釈」を離れては「事実」はありえず、したがって「解釈」を含んだかたちで「歴史」が議論されることとなる。また、この点からは「解釈」をめぐる「対話」Ⅰ「議論」が必然化され、その場の確保Ⅰ保証も必須となる。ことばを換えれば、「事実」を参照系とせずに、「歴史」を「解釈」をめぐる対話とし、「解釈」の継続として「歴史」を把握するということである。

2カーの提起は、旧来の歴史学を問題化し自己点検を迫り、ランケ以来の実証主義的手法への批判となっている。ランケが厳密な手法で「事実」を確定するのに対し、カーは、そこに介在する歴史家の役割を強調する。いまや、こうした「歴史」把握が主潮流となっており、カーの先見性にケイフクしつつ、二つのことを想念する。

第一は、上記のことは反面で、「解釈」が独り歩きする事態も生みだしてしまうことである。ホロコーストを否定するなど、自らの「解釈」を絶対化し、他の解釈を排除する歴史修正主義派の登場が頭に浮かぶ。現在においては、かつても存在していた否定派／修正主義派が、(これまでのように)「事実」ではなく、(あらたに)「解釈」を競い合う姿勢を持ち出し、争点が変わる事態にまでなっている。それ自体は至当で必然的な「解釈」にもとづく歴史認識のもとで、あらたな次元の問題が生じるのである。この点に関しては、あらゆる「解釈」が妥当性を持つのではないこと——「解釈」のための手続きと、それに続く「対話」と「議論」が何より欠かせないことを強調しておく。

第二は、こうして歴史学者も「歴史とは何か」という問いを抱え込むのだが、歴史学ではその「解釈」は、歴史叙述として提供されるということである。諸学が「歴史」を語り始めるなか、歴史学の領分は、「解釈」を積み重ね歴史像として紡ぎ出すこと——歴史像の提供にある。もっとも、実のところ、大多数のアカデミズムの歴史家たちは、なかなか方向転換をせず、いまだにその姿勢は頑(かた)であるが、歴史家に要

求されるのは、メタヒストリーを組み込んだ歴史叙述であり、その歴史像に基づく「対話」と「議論」ということになる。「歴史とは何か」という問いの現在進行形のかたちだが、歴史像の新たな提供として具体化されるということであり、そのことは、旧来の歴史像の書き換えをめぐってなされることとなる。

こうしたなか、思い起こされる一冊として、三木清『歴史哲学』(岩波書店、一九三二年)がある。三木は、近代の歴史認識について、「存在としての歴史」／「ロゴスとしての歴史」を人口として説明する。前者は起こったこととしての歴史、後者は書きとめられたものとしての歴史であり、双方はそれぞれの時代で(それぞれの時代の論理で)統一されているが、三木は両者を弁別し、そのあいだの「距離」「乖離」を見据える。そのうえで、(1)歴史は、「現在」から「手繰り寄せる」ものであり、(2)「歴史には書き更えられる必然性が内面的に属する」とした。「歴史が書き更えられる条件は同時に歴史が書かれる条件である」とし、さらには「歴史は未来から書かれる」と言い切る。

三木の議論のガンモクは、二項で歴史を論ずるのではなく、第三項として「事実としての歴史」を持ち出す点にある。歴史叙述には「選択」と「全体」の認識が必要であり、その基準として「現在」から導き出されるものとして、「事実としての歴史」をいう。「事実としての歴史」の概念は難解だが、「現在」に向き合う問題意識から「選択」される出来事であり、そこからまとめ上げられる認識といたらよいであろうか。三木は「現在のうちに含まれる未来が現在に対して否定的なものの意味を担っている」といい、「現在」という瞬間から導き出されるものとしての「事実としての歴史」をいう。(いま)の問題意識によって手繰り寄せられる出来事の束である。

三木は、「近代」の歴史概念が、「現在」において転換されようとしていると認識し、代わって「現代」の歴史概念を提起した。見据えていた同時代の危機意識によって、あらたな「歴史哲学」を提起した。三木が見据える危機と、カーが見て取った危機とのあいだに相違があるのはむしろだが、危機の意識が「歴史とは何か」という「問い」とみずからの「回答」を提供することとなった。

二〇二三年の(いま)もまた、コロナ禍が過ぎ去らないなか、昨年から続くロシアのウクライナ侵攻の危機のなかにある。二〇一〇年代からの(より限定すれば東日本大震災以降の)危機のなかにあるというのが私の観察だが、この危機のなかで、「歴史とは何か」があらためて論じられている。危機意識によって、過去が異なってみえてくるということであり、歴史の概念が変わるということである。

とともに、こうした営みが歴史教育にも及んでいることが、(いま)の特徴のひとつであろう。二〇二二年四月から、高等学校で新しく始まった必修科目「歴史総合」は、ここまで見てきたような「歴史」概念の変化を反映した科目である。

これまで「日本史」と「世界史」を別の科目としてきた歴史教育に対し、一八世紀以降の歴史を、世界史と日本史を総合して教える、という内容を持つ。「日本史」＝ナショナル・ヒストリーとして組み立てられてきた科目を、世界史の事象と総合して新たな歴史像を作り上げるためには、「事実」のあらたな「解釈」がなされなければならない。【Ⅱ】、近代日本の形成についての観点から「解釈」されてきた明治維新を、

世界的な文脈で「解釈」することにより、「日本史」と「世界史」の総合を図ることとなる。

あわせて、「歴史総合」は、歴史に対し「問い」をたて、「対話」をすることによって、歴史に接近する。「事実」をふまえつつも、「解釈」を組み込むことにより、暗記科目としての歴史から離脱しようとする科目となっている。「危機」の意識は、変革の可能性と結びついている。

(成田龍一「歴史とは何か―危機の意識と変革の可能性」『世界思想』2023年50号より)

問一 傍線部 a・b のカタカナにあたる漢字として、最適なものをそれぞれ選びなさい。 解答番号は a 12 b 13。

a ケイブク

b ガンモク

- | | |
|--|---|
| ① 自己を <u>ケイ</u> ハツする
② オン <u>ケイ</u> を享受する
③ 損失を <u>ケイ</u> ジョウする
④ <u>ケイ</u> ヤクに違反する
⑤ <u>上</u> 司をソ <u>ンケイ</u> する | ① <u>ガ</u> ンチクのある言葉
② 鋭い <u>チャク</u> ガンテン
③ 人 <u>気</u> の <u>ガ</u> ンク
④ <u>タイ</u> ガンの火事
⑤ <u>ガ</u> ンバンを掘削する |
|--|---|

問二 空白部 I、II に補う語句として、最適なものをそれぞれ選びなさい。ただし、一度使った番号は二度使ってはいけない。

解答番号は I 14 II 15。

- | |
|---|
| ① たとえば
② ただし
③ だから
④ そもそも
⑤ にもかかわらず |
|---|

問三 本文中には次の一文が抜けている。補う箇所として、最適なものを (1) (5) から選びなさい。 解答番号は 16。

【「歴史とは何か」をめぐる地平は、たえず動いている。】

問四 空白部Aに補う語句として、最適なものを選びなさい。解答番号は 17。

- ① 恣意的 ② 偽善的 ③ 神秘的 ④ 例外的 ⑤ 反逆的

問五 空白部Bに補う語句として、最適なものを選びなさい。解答番号は 18。

- ① 国民性 ② 歴史性 ③ 社会性 ④ 週及性 ⑤ 可塑性

問六 傍線部1「あらためて『歴史とは何か』を問題化している」とあるが、カーは歴史をどのようなものだと考えているのか。その説明として、

最適なものを選びなさい。解答番号は 19。

- ① 歴史とは、固定された事実に基づくものではなく、事実に対する解釈を出発点とする対話的な営みであると考えている。
② 歴史を過去の出来事の正確な再現とみなし、解釈をできる限り排除して事実だけに基づいて記述すべきだと考えている。
③ 歴史の解釈は科学的分析で客観的に決定可能であり、時代ごとの多義的な要素は排除されるべきであると考えている。
④ 歴史的事実は変化しないため、その上に積み重ねられる解釈も基本的には安定したものとして成立すると考えている。
⑤ 歴史は社会学や哲学の議論をもとに確立すべきであり、資料や実証に基づく分析は副次的なものであると考えている。

問七 傍線部2「カーの提起」とあるが、これについて筆者はどのようなことを懸念しているか。その説明として、最適なものを選びなさい。

解答番号は 20。

- ① 現在の立場から捉え返した解釈を重視するあまり、過去の出来事の実実性が軽視されることを懸念している。
② 出来事の客観性を軽視した結果として、実証的な史料批判の意義が曖昧になってしまうことを懸念している。
③ 実証主義的な手法が軽視され、歴史叙述による新たな歴史像提示が主流になりかねないことを懸念している。
④ 事実の解明よりも解釈の積み重ねが、歴史叙述の正統な手続きとして定着しかねないことを懸念している。
⑤ すべての解釈に妥当性があるわけではなく、対話と議論を欠いた解釈が独り歩きすることを懸念している。

問八 傍線部3「現代」の歴史概念」とあるが、それによると歴史はどのようなものか。最適なものを選びなさい。解答番号は 21。

① 「現代」の歴史概念によると、歴史は過去に起こった出来事の記録や保存を最優先とし、現代の視点や解釈を極力排除した客観的なものである。

② 「現代」の歴史概念によると、歴史はすでに書かれた叙述に従うべきものであり、現在の視点からの再構成は信頼性を損ないかねない。

③ 「現代」の歴史概念によると、歴史は出来事を現在の問題意識との関連で認識し、事実の選択と全体像の構築を通じて紡がれるものである。

④ 「現代」の歴史概念によると、歴史家は実際の出来事と、書き留められたものを弁別し、選択と全体の観点から歴史像をまとめるべきである。

⑤ 「現代」の歴史概念によると、歴史家は過去の出来事の分析から未来の出来事を予測したうえで、歴史の全体像を俯瞰的に形成する必要がある。

問九 次の記述のうち、本文の内容に合致するものとして、最適なものを選びなさい。解答番号は 22。

① 新訳者の近藤は、原著にない補註や解説を排除し、カーの主張を忠実に伝える構成を重視して翻訳を行った。

② 新訳版『歴史とは何か』は、冷戦終結直後に翻訳され、当時の政治状況の安定を背景にして再評価された。

③ カーの著作は冷戦期に書かれたものであり、現在は冷戦後の視点から読み直される意義があるとされている。

④ 清水による旧訳は第二次世界大戦直後の混乱期に翻訳されたもので、戦争体験が内容に色濃く反映されている。

⑤ 新訳版の刊行当時は比較的平穏な時代であったため、「歴史とは何か」という問いはあまり注目されなかった。

Ⅲ 次の各問いに答え、それぞれ選んだ解答の番号をマークしなさい。解答番号 23 37。

問一 各群中の傍線部の語の読みが（ ）内に示してある。読みの誤っているものをそれぞれひとつずつ選びなさい。ただし、誤りがない場合は「①」をマークしなさい。解答番号は a 23 b 24。

- a
- | | | | | | |
|---|---|---|---|---|-----------------------------------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① | |
| | | | | | 汎用（はんよう）性の高い工具。 |
| | | | | | 暫く（しばらく）の間、滞在する。 |
| | | | | | 悲喜交々（ひき）。
<small>（きろく）</small> |
| | | | | | 概ね（おおむね）想定通りである。 |
| | | | | | あらぬ嫌疑（けんぎ）をかけられる。 |

- b
- | | | | | | |
|---|---|---|---|---|-----------------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① | |
| | | | | | 権力の専横（せんおう）。 |
| | | | | | 感情の発露（はつろ）。 |
| | | | | | 皇室御用達（ごようたし）の店。 |
| | | | | | 需要と供給の平衡（へいきん）。 |
| | | | | | 詳細は割愛（かつあい）する。 |

問二 次の傍線部の品詞として、最適なものをそれぞれ選びなさい。ただし、一度使った番号は二度使ってはいけない。

解答番号は a 25 b 26 c 27。

- a 魚が泳いでいる。
- b 明日はおそらく雨だろう。
- c 鮮やかな身のこなし。

- ① 助詞 ② 助動詞 ③ 副詞 ④ 形容動詞の一部 ⑤ 連体詞

問三 次のa～eについて、各問いに答えなさい。ただし、一度使った番号は二度使ってはいけない。

- a ☐ 馬に乗る
b ☐ 縁をつける
c ☐ に就く
d ☐ を抜かす
e ☐ 車を押す

I 右のa～eの空白部に入るものとして、最適なものをそれぞれ選びなさい。

- 解答番号は a 28 b 29 c 30 d 31 e 32 。
① 横 ② 尻 ③ 現 ④ 下 ⑤ 因 ⑥ 幻 ⑦ 緒

II 右のa～eの意味として、最適なものをそれぞれ選びなさい。

- 解答番号は a 33 b 34 c 35 d 36 e 37 。
① 一つのことについて没頭すること。
② 夢中になって我を忘れること。
③ 他人のしていることに、よく考えずに便乗すること。
④ 物事が具体的に動き出すこと。
⑤ 道理に合わないことを無理に押し通そうとすること。
⑥ 無理やり言いがかりをつけて、相手を責めること。
⑦ 意志が弱く継続することができないこと。